

愛着障害

2025. 6. 5

最近、愛着障害ともいうべき子どもが増えている。発達障害と症状がよく似ている。赤ちゃんにとって、母子密着が最も必要で母の愛語をたっぷりもらわなければならない時期がある。そのときに、仕事などの都合により、母子分離という養育環境に置かれ、しっかりとした母と子の絆がつくられないところに原因があると言われている。

しかし、言葉の教育をやっていくと、薄紙を剥がすように徐々に徐々によくなっていく。これはやはり語彙が増えてくるのが大きい。

読み聞かせをする際の親子の脳を測定した結果がある。すると驚いたことに、母親の脳では、前頭葉の真ん中の相手を思いやる領域、コミュニケーションを司る領域が一番働いていた。親にとって読み聞かせというのは、文章を読むというより、子どもに高次のコミュニケーションを仕掛けて反応を読み取る脳活動であり、それが活発になっていることがわかった。

では、そのときに子どもの脳はどうなっているかというと、話を理解するときに働く前頭葉ではなく、辺縁系という感情を司る部位が活発に働いていた。つまり、幼い子どもへの読み聞かせというのは、親が子どもに心を寄せ、子どもはそれを受けて感情を揺さぶられる、そういった作業だったということが脳科学から見えてきた。通常の文章を聴いているときの脳活動とは明らかに違う働きが見られる。母親による読み聞かせには、他人のそれとは異なり、特別な意味がある。

幼稚園児のいる家庭に本を提供して実験をした。読み聞かせを受けている子どもたちは、やはり言葉を扱う能力が伸びていた。だが、一番大きな効果は、親の子育てストレスがガクンと減ることだった。子どもに読み聞かせをする時間が長ければ長いほど、それがデータにはっきりと表れる。読み聞かせによって親子の愛着関係がしっかり結ばれるので、子どもが親を引き付けるために悪さをしたり、親の理不尽な仕打ちを想像してビクビクしたりといったことがなくなる。今は、愛着関係がきちっと結べていない親子が多いのが現状である。だが、読み聞かせによって親子の濃密な時間をつくれることが科学的にわかってきている。

ある保育園で、ある方が、キーワードを漢字で書いたカードを見せながら短いお話をした。お話の後で、「これ何でしたっけ？」とカードを示すと、すべて読むことができた。この中に、いわゆる多動の子どもがいた。研修会で先生方がその子どもについて「〇〇君が全く目立ちませんでした。皆と同じようにお話を聞き、カードを読んでいる。信じられません」と驚いていた。その後も、言葉の時間を楽しみにしており、きちんと席について、皆と一緒に音読をするとのことだった。実は、これはこの園に限らず、どこの園でも同じように見られる光景なのだそうです。障害のある子どもでも、本能的に言葉を欲している。

本を介在した愛着関係には、計り知れないパワーが秘められている。そのことをもっと広く知ってほしい。